

Title	6 : 歯周病患者におけるインプラント治療の予後評価に関する症例対照研究
Author(s)	高橋, 由香里; 小笠原, 龍一; 法月, 良江; 伊藤, 太一; 矢島, 安朝
Journal	歯科学報, 113(4): 425-425
URL	http://hdl.handle.net/10130/3173
Right	

No.5 : 上顎歯肉癌術後顎骨欠損に対し顎補綴にて機能的回復を行った1例 - 口腔がんセンターにおける顎補綴外来 -

星野照秀¹⁾, 萩尾美樹³⁾, 岡本江里奈²⁾, 岩本昌士²⁾, 野口沙希¹⁾, 齊藤朋愛¹⁾, 池田千早²⁾,
山本信治²⁾, 佐藤一道³⁾, 山内智博³⁾, 石崎 憲³⁾, 野村武史²⁾, 柴原孝彦²⁾, 高野伸夫³⁾, 片倉 朗¹⁾
(東歯大・オーラルメディシン科外)¹⁾ (東歯大・科外)²⁾ (東歯大・口腔がんセンター)³⁾

目的：腫瘍の治療で生じる顎骨欠損により、咀嚼、嚥下、発音等の様々な障害が生じる。顎骨欠損の機能を回復する治療は外科的再建手術、顎補綴（顎義歯）の2つに分けられるが、咀嚼能力や審美的な回復には、顎補綴による治療が必要不可欠である。

2011年10月より東京歯科大学口腔がんセンターに顎補綴外来が併設され、現在に至る。各々の口腔がんの治療を術前より把握し、関連する職種がチームで治療計画を立てることで、術後の機能回復に至るまで包括的な治療が可能となっている。今回、上顎前歯部歯肉癌術後の顎骨欠損に対して、顎補綴治療による機能および審美的な回復を行った1例を経験したので報告する。

症例：57歳女性。上顎前歯部歯肉腫瘍の精査のため東京歯科大学千葉病院口腔外科を受診。既往に糖尿病、パニック障害があり、口腔がんセンターでの治療を行うこととなった。上顎両側犬歯間歯肉に38mm×32mm大の白斑を伴う境界不明瞭な乳頭状腫瘍を認めた。接触痛、出血は認めない。X線所見では上顎左側前歯部を中心とした、浸潤性骨破壊像を伴う病変を認め、病変の鼻腔への進展、明らかな頸部リンパ節転移、肺転移の所見は認めない。画像検査および組織検査より、上顎前歯部歯肉扁平上皮癌

(T4aN0M0)と診断し、2012年9月全身麻酔下で腫瘍切除術を施行した。

手術に先立ち、顎補綴の担当医と切除範囲を確認し、予め作業用の模型を作成した。創部の上皮化が良好となった術後2ヶ月で顎義歯の作製を開始した。2013年1月に義歯が完成し、装着後は2週間に1度の間隔で義歯調整を行い、現在は1ヶ月に1度程度で調整を続けている。義歯未装着時、装着時において言語聴覚士と連携し発話明瞭度、呼吸持続時間、鼻咽腔閉鎖、RSST、飲水テストにて機能を評価した。また、咀嚼能率に関しては山本式咀嚼能率判定表を用いて行った。

結果および考察：顎義歯を装着することで全ての評価項目で術前に近い状態まで機能的な回復を認める結果となった。今回の症例を経験し、術前、術後に機能評価を行い、目で見える結果を患者に示すことで、患者自身がそのQOLの向上を実感し、治療に対して積極的に取り組む姿勢が変化することがわかった。義歯は口腔内の経時的な変化にあわせた調整が必要であり、本症例においても腫瘍術後の経過観察だけではなく、定期的な義歯調整を行い、口腔の主要機能を維持することが重要であると考えられた。

No.6 : 歯周病患者におけるインプラント治療の予後評価に関する症例対照研究

高橋由香里, 小笠原龍一, 法月良江, 伊藤太一, 矢島安朝 (東歯大・口腔インプラント)

目的：2006年、AOコンセンサス会議では、歯周病の既往のある患者はインプラント周囲に感染が起りやすいことが報告されている。しかし、インプラントの成功率に影響を与えるかどうかは、未だに統一見解が得られていない。本研究の目的は、歯周病がインプラント治療の予後に及ぼす影響について、各臨床パラメーターを用いて評価することである。

方法：調査対象は、東京歯科大学千葉病院口腔インプラント科にてインプラントを埋入された患者34名(平均年齢63.4歳、男性9名、女性25名・インプラント埋入合計本数：145本)を対象とした。①初診時、②上部構造装着時(パノラマX線写真のみ)、③上部構造装着後3年以上経過時における、Probing pocket depth(PPD)、Bleeding On Probing(BOP)、パノラマX線写真から得られた資料より検討を行った。初診時の歯周病検査により、非歯周炎患者群(正常～軽度歯周炎)14名、歯周炎患者群(中等度～重度歯周炎)20名の2群に分類した。残存歯数、天然歯におけるBOPおよびPPD、全顎残存歯支持歯槽骨喪失度(ArBスコア)、インプラント部周囲骨の吸収程度(上部構造装着時～装着後3年以

上経過時の骨吸収)の各項目において評価を行った。尚、すべての症例は適切な歯周病治療が行われた後、インプラント治療へ移行した。本研究は東京歯科大学倫理委員会の了承を得て実施された。

成績および考察：上部構造装着後3年以上経過時において、BOP、4mm以上のPPD歯率、6mm以上のPPD歯率で歯周炎患者群では初診時と比較して有意な差がみられた。ArBスコアでは有意な差は認められなかった。調査期間中のインプラント体の脱落は無く、インプラント周囲歯槽骨の吸収程度は僅かであった。しかし、非歯周炎患者群と歯周炎患者群間においてインプラント周囲歯槽骨吸収程度で有意差が認められた。

歯周病臨床パラメーターの結果から、確立された術前の歯周病治療、術後のメンテナンスを行うことで、歯周病の悪化リスクが軽減されることが示唆された。しかしインプラント周囲骨吸収程度の結果から、重度歯周病の既往は骨吸収を伴うインプラント周囲炎の罹患リスクを増加させる因子であることが示唆された。今後、症例数を増やし、さらに長期的な予後を評価する予定である。